

卷頭言

変る環境、変らぬ意識

大学入試センター所長 高橋良平

「環境を守れ！」「生態系をこわすな！」の合言葉は今日では何處でも、いつでも大手を振ってまかり通れる免罪符の様なものになっており、「〇〇反対」、「××反対」のデモにもこれ等の言葉さえ掲げておけばデモの人数はふえ、気勢は上ることになっている。ところで、生物は生存する為、また、種属の繁栄をはかる為常に闘争を繰返しているわけであるが、弱い種属はより強い種属に追われて移動せざるをえないで自然の生態系といえども決して一定不变のものではありえない。生物史に明らかな様に、氷河期の到来など気候の変遷によって、変りにくい植物相も北に南に、或は高所、低地へと移り、それに伴って餌を求める動物も又移動せざるをえない。いうなれば、生態系は食物連鎖を基本として変化する生物相の一断面ということが出来よう。ある区域内での棲息・繁殖が可能であれば動物は移動する必要はないが、その為には妥当な個体数が維持され食物連鎖がうまく機能しておかなければならない。動物に比して移動の少ない植物生態でさえ気候変動にあわせて移動することを先に述べたが、気候変動がなくても、乾一湿の植性サイクルが行われているのは、高位→中位→低位と変遷する泥炭の植物相変化をみても明らかである。

そうは言いながらも、広域に亘る森林の伐

採、或はある特定の動物の乱獲によって我々は自然の動・植物の生態系を乱していることも事実である。もちろん、人為的作為で自然に変動する生態系にどれ程の影響を与えているか不明ではあるが、我々の身近な周辺で確かな変化が起こっているのは認めざるをえず、自然環境破壊に手をかしている事を否定する訳にはゆくまい。ただ、言い訳がましい弁明にはなろうが、世界人口10億人の時の自然環境と人間活動との関係は人口50億人時代と同じであるはずではなく、どうしても10億人時代より環境に与えるインパクトが大となるのはやむをえない。まして快適性、利便性を追い求めて大量の物資を消費している現在は、10億人時代の数十倍の人口増加があったとみるべきであって否応なしに生態系を乱さざるをえなかつたし、今後も乱し続ける事になるかもしれない。さらに、一度手にした利便性・快適性は仲々に手放し難く、人口増加に加えて発展途上国の人々の生活水準の向上は当然あるべきであるので、自然環境を現状のまま維持することさえ至難の業というべきかも知れない。従って先進国国民は生活のこれ以上のレベルアップの欲望を抑止する事はもちろんの事、幾らかでもレベルダウンを心掛けないことには自分達が乱した環境を修復する事さえむつかしい。我が国では幸か不幸かバ

ブルがはじけて世の中は不景気となり……世に言う程不景気なのかどうか、GW中の海外渡航者数の多さに疑問は残るが……国内の異常な“環境破壊”的速度もようやくにしておとろえたかに見えるが、それでもなお途上国の人々が不法入国をしつづける程我々はまだ豊かな暮らしを享受しているのであって、依然として莫大量的物資を輸入し間接的な環境破壊を続けていることに変りはない。しかばね、
“直ちに輸入をとめてしまえば良いではないか、うまい物を喰べあさるのをやめてしまえばよいではないか”と私などはすぐに短絡的解決を急ぎたがるのであるが、途上国からの輸入を止めてしまえば忽ち国際関係の悪化に飛火するし、管理貿易との反撃を喰うことは目にみえている。せめて、輸入素材が現地で再生産出来る程度に収穫量を抑えて輸出させ、幾分でも彼の地の環境ダメージを軽減させる努力をするぐらいが精一杯の対策ではなかろうか。

不景気到来で我々の周辺からは確かに色々のものが姿を消した。毎朝新聞に挟みこまれる多量の広告に手をやき、苦々しく思っている多くの人々にとってはむしろこの不景気の思わぬ結果を歓迎する気配さえ窺える。確かに紙資源の消費が少くなることであるのでその事自身は大いに結構な事に違いない。然しこれでは、製紙業者、印刷業者等の業務を減らさせている事になりそう簡単に喜んでばかりはいられない。ここは一つ、皆んなで知恵を出しあって資源のリサイクルを計り「必要悪」とは言えないまでも皆が生きてゆく為の「必要無駄」を意識の改革で順次少くしてゆくより道がなさそうである。今回の我が国の不景気は我々に個々の生活様式を省みるよい

機会を与えたものと受けとめたい。

直ちに自家用車をやめ、華麗な衣食を止めよとまでは言わないが、本気でこれ以上の環境悪化を阻止し、又おかされた環境を修復しようとするのであれば、1人1人が地道ではあるが個々の生活様式の改善を計る覚悟が必要である。「持続可能な開発を前提とした保全」を主張するローマ・クラブ会長ホットライナー氏はまさに言行一致の見事な個人生活を送っており主義主張を貫く人の生きざまをみていている。

さあ今こそ、環境をかわらぬものとする為、我々の意識を変えようではないか！

著者略歴

氏名：Ryohei Takahashi

学歴：九州大学理学部地質学科

理学博士

職歴：昭和61年11月～平成3年11月：九州大学学長

平成4年4月より：大学入試センター所長

著書、賞、研究例等：

石炭地質学に関する研究論文
石炭組織学に関する研究論文 } 多数

燃料協会賞（学術賞）授賞（2回）

保安功労賞（通産大臣）

委員：大学審議会大学院部会委員（部会長代理）

大学審議会組織運営委員会委員

九州北部研究整備構想推進会議会長
(福岡県)

九州文化協会会长

福岡文化連盟会長

etc.